

復興まちづくりの あり方

大学院情報科学研究科 人間社会情報科学専攻 平野勝也
大学院工学研究科 都市・建築学専攻 姥浦道生

調査の観点

被災状況の確認：

損壊程度が比較的小さい場所

周辺状況の確認：

街の記憶を繋ぐものの残存状況

周辺地形の確認

調査のあらまし

土木学会東日本大震災特別委員会総合調査団として

4月3日

仙台空港周辺・閑上・仙台港・南蒲生

4月4日

陸前高田・大船渡・越喜来・吉浜・唐丹・平田・釜石・両石・鵜住居・
大槌・吉里吉里・山田・津軽石・宮古・田老・浄土ヶ浜

独自調査として（工学研究科 都市・建築学専攻姥浦道生准教授との合同調査）

4月12日

石巻・女川・雄勝・大川・志津川・歌津・戸倉

被災状況は千差万別

- ・ 巨視的地形条件（リアス型 or 平地型、湾の形状、向き）
- ・ 津波防災史（高地移転型等々）
- ・ 津波防御施設の設置状況（湾口防波堤、津波防波堤）
- ・ 微視的地形条件（微高地、山陰等）

一律の「高地移転・エコタウン」では何の解決にもならない



仙台空港周辺



いぐねや微高地では損壊
程度が比較的軽微
(前ページの○の箇所)



石巻日和山：海側

石巻日和山：街側

山の麓は山陰になっているため、
損壊程度が比較的軽微



江戸時代からの川湊

古来からのまちづくり

- ・ 自然堤防などの微高地
- ・ 山陰
- ・ 居久根

平川先生の話にもありましたが

街道は排水のため微高地を通る

近代以降も、学校は高台や街の中心に置くなど、こども達を大切にしたまちづくり。

自然との再共生

- ・江戸以前

→人間は無力。地形・地質を読んだ集落立地

- ・人口増加

→地形・地質を読んだ集落立地以外を開発せざるを得ない状態

- ・人口減少

→効率のためのコンパクトシティだけでなく、
防災のためのコンパクトシティ

An aerial photograph showing a town that has been severely damaged by a disaster. The foreground is a grassy hillside. In the middle ground, a road and a river (the Shizuku River) are visible. The town's buildings are mostly destroyed, with debris scattered everywhere. A yellow circle highlights a specific area in the town. The background shows a range of mountains under a clear sky.

数m高いだけでも随分違う

志津川



高さに応じて、損壊程度が違う

大船渡

被災軽減の可能性

数mの標高の違いでも損傷程度に大きな違いがある

→遠くの高台に移転しなくても、複数の対策の組み合わせが奏功する可能性。

→シミュレーションを待ちたい。

時を繋ぐ

- 人間は、環境との結びつきで生きている。
 - ex. 「住めば都」 結びつきが強いことが都となる
- 小さな歴史を大切にすまちづくりが、全国で実施。
- 津波が奪ったものは、「生命・財産」だけではないと言う視点が不可欠。
 - ex. 家族のアルバムを探す被災者の方



残っているものは大切にしたい

神社が街道を見守る 日本古来の集落構成

建物が津波に押し流されていても、街の組み立ては残っている



時を繋ぐ

- 幸い残った建物
- 街の組み立て
- 周囲の山々

こうしたものを、最大限活かし、津波が分断した「時」を繋ぐなちづくりを。

まとめにかえて

- 被災状況や周辺状況の、丁寧な診断に基づくきめ細かい防災対策が必要
- 複数の施策の組み合わせを実現可能とする制度 (縦割りの打破)
- 津波が奪ったものは、「生命・財産」だけではない→時を繋ぐまちづくりへ
- 自然との再共生という視点